

イネカラバエの防除時期について

望月正巳・守田美典

(富山県農業試験場)

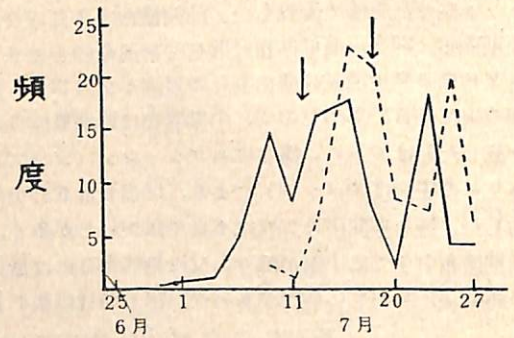
昭和30年及び31年度に於いて大面積(約5町歩)の集団防除と各種薬剤の効果比較試験を実施したので、その結果にもとづき薬剤撒布適期について考察してみたい。昭和30年度に実施した試験結果についてデルドリン供試区中、効果の最も高かつた区の傷穂率をみると、防除時期試験の成虫羽化最盛期後5日、10日、15日の3回撒布区が9.18%、撒布量試験の最高4斗区(ミスト機使用による)が8.22%使用濃度試験の反当600cc区(ミスト機使用によるデルドリン乳剤)が10.79%で、約1町歩を供試した集団防除試験では最も低率の5.08%を示している。

このように、どの試験から拾つても傷穂率は期待したほど低下せず、収量の調査結果をみても前記各試験いづれも精穀重、玄米重、屑米重に全く差を認められなかつた。この原因については種々の要因が挙げられるが、最も大きなものとして考えられたのは、成虫羽化消長(木框使用による)を基準として行つた撒布時期判定の適否であつた。即ち調査框による成虫羽化消長と水田内の産卵消長を検討してみると、本県に於いては両者の最盛期のズレは2~3日であり、成虫羽化最盛期後5~7日目に行う薬剤防除は産卵最盛期後にあたる事が判つた。本年は以上の理由に依り薬剤撒布時期を昨年より早くし、1回目撒布の目標を成虫の羽化最盛期の4~5日前(産卵最盛期の7~8日前)におき、2回目を羽化最盛期後3~4日に行うように実施した。デルドリン4%粉剤を用い品種シロガネの5町歩集団地で行つた集団防除結果では第1表に見られるように平均傷穂率が防除区3.38%、無防除区18.1%となり昨年度の集団防除に比べると非常に低率化した。又収量に於いては玄米重で7.96%が増収となり明らかに防除効果を認められた。又小面積(1区3.9坪)の薬剤比較試験のデルドリン乳剤撒布区は、単用は0%、0.5%。混用(デルドリン+マラソン)は0.5%、1.02%の傷穂率で無撒布区の平均13.4%に比べ明らかな差が認められ、圃場に於いても観察によつては被害を認めることができなかつた。ただ、収量はメイチュウによる被害からサンプリングに支障を生じて明らかではなかつたが玄米重で僅かに差を認められたよう

ある。

以上のように撒布時期を昨年より早くした結果、傷穂率は何れも期待の線まで下げることができた。本県のようにイネカラバエの成虫羽化最盛期と産卵最盛期との期間が短い地帯では撒布適期を成虫の羽化消長と産卵消長のみ頼ることは防除効果を甚しく低下せしめる原因となるようであるから今後の薬剤防除適期の把握には、前記の羽化消長と産卵消長の他に圃場に於ける幼虫の蛹化消長と産卵消長の関係を探求して行えばより一層適確な薬剤防除が実施できるものと考えられる。

第1図 昭和31年2化期の成虫羽化及び産卵消長(品種シロガネ)、実線は成虫羽化消長、破線は産卵消長、矢印は薬剤撒布日



第1表 デルドリン4%粉剤による集団防除成績

| 調査田 | 防除区 | 無防除区 | 備 考 |
|-----|-------|-------|-----------------|
| A | 4.84% | 3.84% | 撒布月日 第1回 10/VII |
| B | 3.49 | 30.19 | " 第2回 23/VII |
| C | 1.66 | 15.94 | 羽化最盛期 16/VII |
| D | 3.88 | 30.93 | 防除面積 5町歩 |
| E | 6.43 | 8.58 | 品 種 シロガネ |
| F | 4.93 | 7.10 | 調査月日 6/IX |
| G | 1.43 | 22.23 | 調査株数 50株 |
| H | 4.22 | 26.33 | |
| I | 1.00 | | |
| J | 1.87 | | |
| 平均 | 3.38 | 18.10 | |